呉香

「ん、んんっ……！ あー……あーっ」

軽く喉の調子確かめ、髪を触る。

……悪くない、いつも通りの少し高め之音。普段通りの声が出ている……と、自分では思う。

茶色い自分の髪の調子も、部屋を出る時に確認した通り。普段と変わらず、……いや普段より少し気合が入ったままで、調子は悪くない。

「こほんっ！ 来兎ー！ いるー？ 入るわよー！」

簡素な扉。

刑務所の囚人部屋の扉を思わせる金属製の扉越しに、私は声をかけ、戸を叩く。

普段ならば、部屋の前を巡回している警邏の人間もいるのだが、一仕事を終えたのを理由に、無理を言って暫く時間を作って貰った。

暫くは、この部屋には誰もやってこない……一人きりの時間、という訳だ。

「おう、呉香か？ 開けられるんだろ、入って来いよ」

「んっ……」

中から帰ってきた声に、私は預かっていた鍵を扉に差し込み、鍵を回す。

ガチャリと、軽い音を立てて扉のロックはあっさりと外れてしまった。

あっけない、あまりにも簡単に出来てしまったソレが、逆に私の戸惑いを高めるようで

…自分でも訝しみたくなるほど、ドキドキした気持ちで、取っ手を回し、扉を開く。

「よう…どうしたんだよ？ 面会の時間って訳でもないだろ？」

「ま、ね。ちょっと特別に時間作って貰ったのよ…元気してる？」

「ハッ…元気もクソもあるかよ。CGZの狗やって、あとは囚人生活だぞ？ …君の顔でも見なけりゃ、元氣の一つも湧きやしないさ」

ベッドの上に寝転んでいた、尖った金髪をした男。羽場見来兎はばみらいとは、私が顔を覗かせる
と、身体を横向きにし、暇そうにしていた顔から一転、少し皮肉さを交えながらも強気な
態度で笑ってみせた。

…どうやら、理不尽な目などは合っていないらしい。そのことに私は安堵しつつも、彼の皮肉に正論を返していく。

「文句言ってんじゃないわよ！ 本来なら、処理班に処理みされるなり、冷凍刑にされるなりだった所を、保護観察処分扱いでチルドレンとして様子見して貰えてるだけで儲け物なのよ？ …そんだけやらかした自覚くらい、あるでしょ」

「分かってるさ。だからこうして、甘んじて罰を受けてるんだろ。…少しでも救われるチルドレンが増えるのならば、前提の上でだけだな」

「…私も、アンタが教官にしたこと、忘れたつもりもないし。…ほんと、今の処分で感謝しときなさいよ」

「そう、だな…。ヨギのことは…いや、いい。分かってる…ああ、言葉で反省したつもりになる気はない。…背負うべき、罪なのは自覚してるさ」

一瞬、気まずい沈黙が私たちの間に流れる。

ミサイル強奪、自衛官の殺害、教官の…CGZエージェントの殺害。

大きな物だけでも3つ、これでよくこの処分で収まったものだと、私ですら思う。

……私が泣きついてお願いしたことが、この結果に繋がったと思うのは傲慢かもしれないが、その一部ではあるのかもしれない。

教官のことは今でも複雑だし、自衛官の殺害に関しても……ジャームになっていたとはいえ許せるものではないが。

それでも……私の中に感謝の思いが湧いてしまうのは、私が愚かな女だからだろう。

本来ならばこのZでは決して許されない彼が、ここに……チルドレンとして、再び私の前にいるという。この現実が……信じられなくて、何度も疑いそうになる。

そして、疑うたびに彼の存在を確認して……どうしても、感謝と安堵の思いが、湧いてしまうのだ。

「あー……それで、今日は何しに来たんだよ？ 俺に会うのは、決まった時間とかだけのはずだろ？」

「あ、えっと。……ちょっと、一仕事終わったからね。報酬を兼ねて、アンタに……その……」

気まづさを誤魔化すためか、来兎の目が私に向き、問いかけてくる。

その目の強さに、どうして来たのかを見透かされてしまっているような気がして、ドキリと私の胸が高鳴った。

思わず、しどろもどろに言葉を返してみせたが、段々と声は小さくなっていき……。

「報酬で……俺に？」

「……そ。……会えないかなって、ちょっと、交渉したら……時間貰えて、だから」

どうして来たのかの答えを言わされていくと、途端に羞恥が顔に昇ってくる。

自分の頬が熱くなり、赤くなっていつているのを自覚しながら、つい顔を逸らしぼつぽつと告げていくと……ギシ、つという音がベッドから鳴ったのが聞こえた。

驚いて視線を戻せば、すぐ目の前に彼が……来兎が立っていた。

「……………ったく！」

「きゃっ!？ も、ちょ、いきなり何っ!？ ちよっと、抱きしめないでっ！」

「無茶言うな！ そんな可愛いこと言われて、呉香を。惚れた女を抱きしめずにいられるかよっ！」

ぎゅうと、強い力で彼の腕が私の背中に周る。

厚い胸板に、私の顔が押し付けられ……彼の匂いが、呼吸をするだけで感じられた。

少しだけ汗っぼい、けれど不快ではない……彼の匂いと、人間ミのような熱さをしてい
る彼の体温を。

「んっ、むっ、バカっ！ 馬鹿力で抱きしめるんじゃないって……ああもう、ちよっと放
して！ 苦しいっ！」

「ハハ！ 悪い悪い！ 嬉しくて、ついな！ どれ、これくらいでいいか？」

「む……。まあ、これくらいなら」

背中に周った腕の力が緩められ、押し付けられる顔に彼の顔を見上げる余裕が出来る。

出来た隙間からそうして彼の顔を見ると、子供のようなキラキラとした瞳が私を見
下ろしていた。

「……喜びすぎ、バカ。……にしても、すごいわねこのZ。まさかアンタの身体、ここまで治すなんて」

「ああ。それに関してだけは俺も感謝してる……。ま、中身は殆ど機械なのは変わらないけどな？ ……培養した人造パーツで、人としての機能を取り戻せるとは、思わなかった」

彼の温もりを間近で感じながら、改めてこのZの技術力……。特にレネゲイドに関しての技術には感心させられる。

機械として身体の殆どを失っていた彼を、僅かに残っていた細胞から最低限の臓器を修復。

殆ど機械なのは変わらないとはいえ、それを入れ替えることで人としての感覚を取り戻せる所まで状態を安定化させるとは、流石に夢にも思わなかった。

「前の身体じゃ、呉香に触れててもあまり感触も分からなかったしな。……こうして触れ合えてるのをはっきり感じられる。これだけでも戻ってきた価値はあったと思うぜ」

「……調子乗り過ぎ。どんだけ私に依存してんのよ、ったく」

彼の軽口に、苦笑をしてみせる。

すると、見上げる彼の口元が、きゅっと強く結ばれた。

「……冗談だと思うか？」

「え……？」

ふいに落とされる問い掛け。

見つめてくる瞳は、何処までも真剣そのもので……。そんな目で見られていると、いやで

も胸の鼓動が高まるのを感じてしまう。

「俺に会いに来てくれたってことは……自惚れだなんて、思わなくてもいいよな？ な

あ、呉香……」

「来兔？ ちょ……あ……まっ、んっ！」

彼の顔がゆっくりと下りてくる。

拒否するのならば、拒否しろ……そうするだけの時間は与えると、そう言外に言っていないようであった。

私は、その近づいてくる彼の瞳と唇を、視界いっぱい広げながら文句を言おうとして口を上に向け……結局言わずに、そのまま閉じて、彼を待つ。……瞳も、一緒に閉じながら。

ちゅ……。

小さな、水音が響いた。

「……良かった、嫌がないんだな」

「……バカ、もっとムード作りなさいよ。アンタは……っ」

唇を触れ合わせるだけの、淡いキス。

ざらりという彼の唇の感触が消えてから目を開くと、悪戯に成功したことを喜ぶような、子供の笑みがそこに広がっていた。

それが、なんだか無性悔しくて……恥ずかしくて、つい悪態をついてしまう。

「おい、これでも精一杯ムード作ってるんだぜ？」

「何処がよ……無理矢理キスしてきたようにしか見えないわよ？ ……ほら、んっ！」

「なんだよ、文句の割りには……いや、何でもない。おう、んっ」

文句を言いながらも、今度は私から唇を差し出す。

何やら言いたげにしていた来兎は、苦笑をしてからそれを打ち消すように、また私の顔へと唇を落としてきて。

ちゅ……、ぴちゃ、くちゅ……。

触れ合わせた唇に、今度は舌を絡める。

唇を舐め、彼のガサつきを取るように湿らせると、今度はお互いの舌が触れ合う。

ぬるりという感触……。

私の舌を巻きとるように絡み付いてくる、彼の舌。

ぴちゃり、くちゅりと雫が糸を引いてお互いの口を出入りするのを感じながら、ゆっくり舌伝いに彼の口の中へと、私の舌を差し込んでいく。

「んんっ……らい、とお」

「むっ、ちゅ……くれ、は……んっ」

口の中を舐めるようにして、お互いを柔らかな肉が伝い合う。

私が彼の歯を、歯茎を、舌の裏をと舌を這わせれば、彼もまた同じように私の口の中を舐めてくれる。

「はぁ……じゅる、ちゅ……れ、ちゅ。んっ……っ！」

「ちゅう、ぢゆる……ふうっ、んっ！ はぁ……、くれは……！」

暫くそうして口を合わせ続けてから、ゆっくりと舌を抜いた。お互いの唾液の糸が、口の端から零れて地面に落ちる。

……彼の目が、熱く私を見つめている。

私の目も、彼を見つめて……潤んでいるような気がした。

「……いいな？」

「んっ……」

彼の胸の前で小さく頷けば、ジャケットを脱がされ、横に置かれる。

整えてきた髪に手を当てられ、顔を寄せられ……すん、と匂いを嗅がれるのが分かった。

「ちょ、バカ……やめてよ！」

「なんでだ？ いい匂いだぞ。……俺の好きな、呉香の香りだ」

こいつが女慣れしてただなんてのは、絶対嘘だなと今なら分かる。

だって、女心の一つも分からないだから……例え好きな匂いだなんて言われたって、恥ずかしいものは恥ずかしいのだ。

恥ずかしさから身を振った私を、また腕に力を入れて逃がさないようにして、彼は私のお尻に手を回し、横抱きに抱き上げた。

「きゃっ……！？」

「ふっ……暴れるなよ、お姫様？」

悪戯っぽく笑う彼の顔を間近で見ながら、そんなことを言われて顔が熱くなる私。

……くそ、こんな少女趣味。持ってたつもりがないのになっ！

心の中で悔しがってみせても、現実の私の身体は碌に抵抗もしないで、大人しくベッドに横たえられていく。

とさり……。

彼の使う安っぽいシーツの感触を背中に感じる。

同時に、むわりと包まれるように広がる彼の……来兎の匂い。

「……良いシーツ使ってないわね」

「当たり前だろ？ 囚人みたいなもんだぜ、俺は。でもよ……すんっ」

「あっ、バカ！ だから匂い嗅がないでって……んうっ！」

苦笑いを浮かべながらそう言って、来兎が私の身体に顔を寄せてくる。

薄いシャツ越しに身体の匂いを嗅がれて、押しのけようと、思わず彼の顔に手を当てる。

けれど、私のそんな抵抗を気にした様子もなく、彼は鼻を押し付け深く呼吸をする

と……ニヤリと、笑ってみせた。

「今日から、高級シーツだな。君の匂いが着いてくれるなら、よく眠れそうだ」

「……絶対ヤダ。アンタ、洗いなさいよ！ 絶対よ、絶対だからね!？」

恥ずかしいことを平気な顔をして言ってくるコイツに、顔が真っ赤になってしまうのが自分で分かった。

そんな風にベッドの上でもみ合っていたら、気付けばシャツを捲り上げられ、気付けば胸まで彼の目に入ってしまったって……。

「んっ、バカぁ……！」

「いいじゃないか、可愛くて俺は好きだぜ。呉香の胸」

「つつつつ！！！！！」

……教えないけれど、今日のために準備してた。

レースの付いた、黒のブラジャーの上から彼の唇が私の胸にキスをする。

私は、なんだかもう恥ずかしくてどうしようもなくなってしまっ……何も言えなくなる。

そうして動けずにいると、また腕が後ろに周り……かちやりと、ブラジャーのホックが外されてしまった。

気付けば、ちよっとずらせばもう……私の胸が、彼の目に晒される、その寸前になっていた。

「……あ、う。来兔……」

「……呉香」

言葉にせず、いいよな……つと視線で問いかけてくる、彼。

私は、羞恥で熱い顔を、戸惑いながら……小さく、こくりと上下に動かす。

する……つという、軽い音と共に、レースのブラジャーはあっさり肌を滑って落ちていった。

もう彼の目を遮るものは何もない。

私の、隠すモノない……人より控えめな胸が、彼の視線の中にあった。

「有恵とかと比べて……小さいとか言ったら、ぶっとばすから」

「言わねえよ。どれだけ信用ないんだよ、俺」

恥ずかしさでまともに目も見れない私。

それでも、彼が困ったように……少し面白がるように笑ったのは、空気で分かった。

そうして、ぎゅっと目を瞑っていると……。

胸に、ちゆく……っという音と共に、柔らかくて、湿り気のあるナニかが触れるのを……

感じた。

「あ……うっ」

「ちゅ……れる、んっ。言ったら？ 可愛い胸で、俺は好きだ……って。は、むっ」

「んんうっ!? らい、とお……っ」

ぴちゃり、くちゅり……。

胸を……その先端。乳首の先をぴちゃぴちゃという水音と共に、柔らかで自由に動くモノが、触り、掬い上げ、何度も吸いついてくるのが分かる。

ビリビリと、電気でも流されてるのかと思うような甘く淡い刺激。

その刺激に思わず私は……上擦った、変な声を出してしまう。

「……ぷっ！ あは……何それ、アンタ？ マジな顔して……あんっ！ ふふ、私の胸、吸いついてる……っ」

「ぢゆる……ちゅぷっ、はぁ。なんだよ臭香。笑うなって……！」

「だって、ふふ。なんか、必死に吸い付てるの見たら……んっ、ふぁっ!? あっ……ふふ、おかしくって……ふふふ、んんっっ！」

ブラックドッグの力で変なことでもしてるんじゃないかと思って薄っすらと目を開けると、そこには……私の胸に、真面目な顔で吸いつく来兎がいた。

大事なモノに触るみたいに、私の乳首を必死に舐っている来兎。

悪気はないのだけれど、なんだかその必死さが少しだけおかしくって、つい笑ってしまっただけだ。

「君なあ……ムードだ何だって言う癖に、自分から壊してどうすんだよ」

「ごめ、ごめんって！ でも、だって……」

「そういう悪い奴には、こう……だ！」

「んぁっ!? きゅっ、ふぁ、う……んんうっ！ ちよ、やめ……舐めながら、弄るのはナシだ、って！ んっ、ぁ……っっ!!」

笑ったことで期限を損ねたのか、眉を寄せる来兎。

それがまた何だか微笑ましく思えて笑みを浮かべると、ため息交じりに言葉を吐き出される。

そうして何か思いついた様子で口元を歪ませた来兎は、今度は私の胸に吸いつくと同時に空いていたもう片方の乳首を指でこね回し始める。

「んっ、ふ……ぁ、くっ……！ だめ、だって……そんな風にされる、と……っ！」

自分で弄ったこともないような触り方で、乳首を摘まれ、くりくりとこねられ、それが

らゆっくりと乳房の形を確かめるように撫でられた。

ちゅぱちゅぱと、水音を立てて涎塗れになっていく私の胸。

こねられ擦られ、どんどん快楽を高められていくもう片方の胸。

いやがうえにも、私の吐息は跳ね、呼吸が乱れてしまう。

「は、あ……来兎お……。も、ほんと……。それ、やめ……。ちよつと、まず……。い、か……。らあ
っ」

「ちゅぶ、ぢゆる……。何が、まずいって？ 笑えるくらい、余裕あるんだろ？ んっ、れ
ろ、ちゅぶ……。！」

「は、あう……。んんうっ！？ も、もお、笑ったのはあやまる、からっ！ だから、いつ
たん、おちつ……。い……。っっ！？ や、あ……。だ……。めっっ！？」

お腹の奥がムズムズとしてきて、まずいと思った私が一旦待って欲しいとお願いした所
で、来兎の手が動いた。

私のズボンのボタンを外すと、おもむろに中に手を入れて来たのだ。

そこには、胸を……。乳首を弄られ、当然のように湿り気を帯びてしまっている私のシヨ
ーツと……。その奥にある、私の……。場所が、ある訳で。

湿り気によって、シヨーツ越しでもはっきりと分かるようにピンと立ってしまっている
モノ。

……。クリトリスを、容赦なく、彼は触り……。きゅつと、抓った。

「っっっっ！ あっ……。らい、ら……。い、と……。だめえっ！？ て、はなして……。でち
ゃ……。で、ちゃっ！？」

「ちゅう……。出せよ、臭香。恥ずかしい所、俺だけに見せてくれよ……。な？ あ、むっ！

「ふ、あ……つつつつ！　バ、………かああつつ！！??」

本当に止まって欲しくて懇願すれば、むしろそれをおねだりとも取ったのか。来兎は止まる様子も見せず、むしろ動きを激しくさせてくる。

私は、胸とクリトリスを弄り回され、胸からも、アソコからもにちゃにちゃとした音を響かせるハメになった。

そうして耐えるのに必死で、身動きすら碌に出来なくなっていると……当然、すぐに限界はやってきて。

「く、あ……らい……とおおおつつつつ！！??」

「んっ、いいぞ呉香。……俺の、呉香……つつ！！」

彼の指に私のアソコを……クリトリスを、押し付けるようにして、ビクリと私は身体を震わせた。

ぢゅるると胸も吸い上げられ、同時に乳首とクリトリスも、きゅうと抓られ、撫でられ、こねまわされて……私の腰は何度も跳ねて、ビクビクと痙攣をした。

「あっ、あっ、あっ、……あああああつつ！！」

「ちゅ……ぶはあっ！　ふ……触っていると、君がイッたのよく分かるな。……気持ちよかったか？」

「くっ……う……んんうっ!?　……聞く、な……バカあ」

痙攣する私の場所。

膣口からは、ぴゅっ、ぴゅっ、という水が何度も飛び出る感触がああった。

…どうやら、潮を吹いたらしい。

それが来兔の、彼の指に当たっているのは、押し当てられた指の感触から、はっきりと分かってしまう。

こんな状態で、どう誤魔化せというのだ…あぁ、ちくしょう…恥ずかしいっ!!

顔を真っ赤にして伏せる私に、来兔は屈託のない…。

いや、むしろこの状況で向けてくるには腹立たしいような顔を向けてくる。

なんでこの男、女をこんな目に合わせておいて、さも自分は良いことやりましたみたいな顔出来るんだろう…腹立つなあっ!?

「…来兔、ちょっと手え抜いて…脱ぐから」

「え？ あ、おう…」

彼の思う通りにイカされたことと、何だか向けられたその顔にムカムカ来て、私はクリトリスを撫でていた来兔の手を引っこ抜く。

そうして、すっかり水気を吸って重くなってしまったズボンを脱ぎ捨て、肌張り付くような感触になった…これも、言わないが今日のための黒いショーツを脱ぎ去り。

ついでに、胸の上に残っていたシャツを脱いでしまって、すっかりと産まれたままの姿になってみせる。

「…思い切りいいな、臭香」

「お陰様でね…こうなりやもう、ヤケよ！ ほら、来兔！ アンタも脱いで！」

突然、服を脱ぎだした私に目を丸くする彼に、次はアンタの番だと軽く睨んで言う。

そうすると苦笑を浮かべた彼が、シャツを捲り上げるようにして脱ぎ捨て、そのままズボンも放り出すように……パンツと一緒に脱いで、ベッドの横へと放ってしまう。

「……結構いい体してるわよね、アンタ」

「ふっ、機械の見せ掛けの身体だけだな。……呉香の方こそ、綺麗だぞ？」

「……っ！ いいから、今、そういうの言わなくてっ！ ……ありがとう」

筋肉が程よく付いた均整の取れた男らしい身体。

思わず、ちょっと目を惹かれてしまうと、またそうやって……私の恥ずかしさを上増しさせようとしてくる。

……まあ、でも、言われて……悪い気は、しないけど。

「……選手交代、次は私の番だから」

「ん？ 呉香、それはどうい……」

「っ！ だーかーらあーっ！！」

彼をベッドに横にさせ、その上からまたがるように腰の上に乗る。

……お尻の下で、むくり起き上がっていたモノ。

彼のイチモツが、これから起きることに期待するように、動いたのが分かった。

「……散々弄ってくれたんだし、次は私が弄ってやるって、言ってるのっ！ ……覚悟、しときなさいよ？」

「……ハハハッ！ ……こんなに嬉しい、覚悟を決めるのは、初めてだな」

顔を赤くしながら言った私の言葉に、彼……来兎は。

ニコやかとも、ニヤつきともつかない……その両方が混じったような顔で、笑ってみせたのであった。

「ん……っ、おつき……。ちょっと、これ……アンタのすごい硬くなってきてるんだけど」「好きな女の子がお尻押し付けてきてくれてるんだぜ？　これで勃たなきや、男じゃねえって」

くちゅりと、音を立てて私の場所と触れ合ってくる来兎の……モノ。

私が、お尻を前後に動かしてみせると、それに合わせてまだ少し柔らかかったソレが、次第に硬く……それこそ機械なのかと思うほどガチガチになり、そそり立っていく。

「ふん……っ！　君を抱けないとか泣いてた癖に……！　こんだけ硬くしてるのに良く言えたまんだわ」

「ハハ……だからこそ、なおさら、だろ？」

潮を噴いた私のアソコ……秘部、おまんこ……まあ、そう呼ぶところは、当然のようにぬめりを帯びていて。

硬くなって立ち上がってきた来兎の……ちんぽに、ぬちゃりと吸いつくように貼り付いていく。

「んっ……っ！」

「お……っ！」

来兎のそそり立ったものに、擦り付けながら上下に身体を揺ると、膣口と……クリト

リスが擦られて、ビリリとした刺激が走る。

来兎も気持ちがいいのか、こうして擦ると眉を震わせて、小さく声を漏らした。

「……ん、ふ！ 悪く、なさそうじゃない……！ アンタの、結構ぬるぬるしてるし……
っ！ 私の、ぬるぬるも合わせれば……かなり、濡れそう、ねっ！」

「呉香が喘いでるのみで、興奮しない訳ないだろ……っ！ っ、お……今も、こうして、君のを擦り付けられて……正直、我慢するだけで手一杯だったの！」

はぁ、はぁと、息を荒げながら彼の先走りと、私の愛液を擦り込むようにして彼のちんぽを濡らしていく。

繰り返せば繰り返すほど、来兎も興奮していくのか。

跳ねるように動く私の姿を、睨むような……物欲しそうな、ゾクリとするような強い眼差しで見つめながら、息を荒くしていつている。

「はぁ、ふう……こんなもの、かしら？」

暫くそうして、息を荒くしながらアソコを擦り合わせていると……少し離すだけで、にちゃりと音を立てて糸を引くまでに濡らすことが出来たのが分かった。

ここまで濡らせば、おそらく……もう十分だろう。

どうせ、私の方は……とっくに彼によって、湿らされているのだし。

「……来兎。そろそろ、ね？」

「ああ。ゆっくりでいい、少しずつな？」

「ん……っ」

私は視線を来兎の瞳に向けると、次に進むと伝える。

彼はそれを受けて一つ頷くと、私の腰に手をあて、支えるようにして力を入れる。

その腕の力に甘えながら、私は腰を持ち上げ……そして、自分のアソコを、彼のモノの先端に、ぴたりと……押し当てた。

すると、にちゃ……くちゅり……、と。

お互いに準備は整っていると、ソコは水音で応えを返してきた。

「ふう……流石に緊張するわね。……言っておくけど、ハジメテなんだからね？ 感謝しな

さいよ」

「分かってるさ。俺以外に、呉香のを奪う奴がいてたまるか。……いたら、正気でいられたか、自信ないぜ」

「ぷっ……！ あんだけ女慣れましたって態度取ってた癖に、何言ってるのよ！ ……バカね。ほんと、アンタ変わんない。変わってない……大バカだわ」

「おい笑うなって！ ……割と、マジなんだからよ」

彼の言葉に思わず吹き出してしまう。

すると、彼が子供みたいな顔で文句を言うものだから、余計におかしくてくすくすと笑みが零れていく。

お互いに裸で、いざコトに及ぼうとする直前に何をしているのやらと思うけれど……それでも、彼の変わらなさが、何故かたまらない程愛おしく思えた。

「はいはい、悪かったわよ！ ……じゃ、いくわよ。ん……っ！」

苦笑まじりに答えてから、ようやく気持ちが落ち着いてきて覚悟が決まった。

ゆっくり、お尻を……私のアソコを、おまんこを。

そそり立っている彼の先端に、沈めていく。

「んあ、くっ……んっ！」

「っ！　くれ、か……っ」

ずぶずぶ、くちゆくちゆと、鈍い水音を立てながら彼のモノを飲み込んでいく私の身体。

やがてそれがほんの僅かな抵抗感を覚える引っかかりに出会い……私はそこを勢い良く腰を押し込んで乗り越えた。

すると、つぶんと。

身体の奥で何かが切れるような感覚がして、来兎のモノが一気にずりりと私の奥へと入り込む。

「んくっ！？　んっ……っ、はあ……っ！」

「おい、臭香！？　無茶しなくて……！」

「何言ってるのよ。これくらい、普段の仕事に比べたら余裕よ……余裕っ！」

実際僅かに痛みを覚えなくはないが、任務で傷付くのに比べたらどうということはない痛みだ。

ただ、痛みを感じて痙攣しているからか……私のアソコが来兎のを締め付けるように纏わりついてしまっていて。

それが彼のカタチを私に、身体の奥から分らせてくるようでむしろそちらの方が……気になった。

「ん、う……。ヤバ、アンタの本当にガチガチ過ぎ。私の中で、すごい膨らんでるの分かるんだけど」

「こんなになって萎れられる程枯れちゃいねえよ！ ……本当に大丈夫なんだな？」

「うん、平気。むしろアンタの形が分かる圧迫感の方が、なんかこう……。すごいくらい」

「そうか……。俺の方が、すごいか……」

何でか知らないが私が彼ののが分かると伝えると、噛み締めるような顔を来兎はした。

……。ひよっとして喜んでるんだろうか？

だとしたら、何というか……。すごく気恥ずかしくて、妙にこそばゆく……。嬉しい。

「何、変な顔してんのよ……。っ。ここからでしょ……。んっ！ ……動く、わよっ！」

恥ずかしさを誤魔化す意味もあって、私は彼のモノを収めながら、腰を上下に振り始める。

ぷくりと、私の中で膨らんでいる彼が、引き抜かれていき……。そして腰を落とすとまた入りこんでくる。

「ん、あ……。は、あ……。んっ、んんうっ！」

「くれ、か……。っ！」

私の中、膣の中で作られる隙間と、それを埋めてくる硬い肉の杭。

交互に繰り返されるその連鎖に、思わず声が漏れていく。

気持ちいいのかは、正直……。よく分からない。身体の中に太いモノが入ってるという違和感の方がまだ強い。

でも……。

「ど、お……らい、とおっ。きもち……いい？」

「あ、あ……っ！ 呉香のが、ぎゅっと締め付けてきて……いい、具合だっ」

「あ、は……っ！ そう、じゃあ……んっ！ もっと、シた、げるっ！」

彼が、気持ち良さそうに、眉をピクピクさせて堪える姿が……すごく、心地良い。

だから私は、もっと……もっと、彼に気持ちよくなって欲しくて、腰を振る。

腰を上下させながら、時に前に体重をかけ、膣のヒダでぞりぞりと彼のモノを擦り上げる。
る。

お腹に力を入れて、きゅっと彼のを膣で啜え込みながら、私の腰を彼の腰まで落とし、ぐりぐり、ぐりぐりと捻じりながら擦ってみせ。

そうしていると、私の中からもとろとろと蜜が溢れ出てきて、彼のモノにしっとり絡み付き始めて……。

「んっ、あっ……！ なんだか、わたし、も……きぶん、でて、きた……かもっ！」

「っっ！ ……すげえ、いい。マジで、最高の……気分、だっ」

「あ、は……うれ、しっ！ らいとお、ね？ キス……キスして、んっ！」

「おう……！ んっ！」

腰を上下左右へと動かしてみせながら、昂った気持ちのままに身体を倒して来兎にキスをする。

彼もまたそれに応えてくれて、舌を絡め、唇を吸い合い、腰を動かしながらの唇の奪い合い。

手は自然とお互いを求めて動き、ぎゅっと……所謂恋人握りの形をとっていた。

「んちゅ、ちゅっ、ちゅるうっ！ ……んんうっ！ らいとぉ……らいとぉっ！」

「くれか……おれのっ、くれか……っ！ー！」

ぱん、ぱん、ぱん。

ちゅう、ぢゅる……ちゅうっ。

生々しいケダモノみたいな音を響かせて、私と彼は交わり続ける。

そうして、腰を振っていると……段々と私の中の彼のモノがビクビクと震えはじめ。

それが、どんな意味なのかは……自然と、分かった。

「らい、と……でる？ んっ！ でそう、なのっ？」

「ああ、出る……っ！ くれかの中に、全部……出すっ！ー！」

「……っ！ー！ ……ばあーかっ！ー！」

ああそうだ、そういうえば避妊……コンドーム、してなかった。

今更そんなことを思い出したけれど、でも、まあ……いいか、と行ってしまった。

それはきつと、私を必死に求める彼の姿が……あまりに、愛おしすぎたせいかもしれない。
い。

「いいわ……だして、だして、らいとぉっ！ ぜんぶ、ぜんぶうけとめて……あげる
っ！ー！」

「っっっっ！ くれかあああっっっ！ー！ー！」

「んっ！？ あ……んんああああっっ！！？？」

私が彼に、受け入れると告げた瞬間。彼のモノが大きく膨らんだ。腰を思い切り押し付けられ、私のお腹の一番奥。

子宮に、ぶつけるような勢いで彼のモノが押し付けられる。

そして……。

どくっ……どぴゅっ！ どくっ、どくっ、どくっ、どくっ！！

「ふ、あ……あっ、あ……く……ん、あ……あああっ！」

熱い、とろとろとした液体が、私の中に注ぎ込まれるのを、確かに感じた。

お腹の中が、ビクビク跳ねる彼のモノから出る、どろどろの液で満たされていく。

そんな訳はないけれど、お腹が彼の液でぽこりと膨らんだかのような幻想。

そんな感覚さえ抱きながら、私は彼の熱に溺れるように喘ぎ声をあげた。

「あっ……あっ、はあ……あああ……は、あ……んんうっ」

「っ！！ ふうー……はあー……すげえ、でる……っ」

「ば、か……だし、すぎ……よっ。んんうっ……！」

いまだに収まらず、お腹が、膣が、びゅーびゅーと液と震えに揺すられているのを感じながら、彼の手を握る。

彼もまた、腰を合わせながら、私の手を握り返してくれた。

そうして、暫くしていると……ようやく彼のモノも落ち着いてきて……。

ずる……ぼ、びゅっ！

…私の膣から、まぬけな音を立てて彼のモノが外れて、注がれた白濁の液が逆流したのが分かった。

「…思いっきり出してくれちゃって、…どうすんのよ。子供とか出来たら」

「なんだ…産んでくれないのか？」

「なっ!? ば、バカっ!! まだ早いって、そういうこと言ってるのっ!!」

「ハハ…まだ、か。そいつは、嬉しいな…!!」

「…ったく、何笑ってるのよ。もう…っ!」

ちよつとまずいことをしたというのに、まるで気にしてない様子の来兎に私は呆れてしまふ。

…でも、なんだかそれで力が抜けたというか。

意識し過ぎるのも変なのかもしれないと思えて来て…、気怠い満足感に浸るように、

彼の身体の上に身を横たえることにした。

「はぁ…もういいわ。…どう、スッキリした？」

「おう…まあ、やって欲しけりゃ、まだ出来るけどな!」

「バカ…っ! ちよつと疲れたんだから休ませないよ! …えっち」

彼の胸を枕にするようにして横になると、ニヤついた来兎の顔が近くに見えた。

まったく、たっぷり出したくせにまだ出したりないのか、この男…。

ジト目を向けつつも、恥ずかしさがこみ上げて来て、また顔が熱くなるのが分かる。

ただ…私も相当だなと思う。

文句も不満もあるのに、こうして悪くなかったって態度で示されると……続きをしてあげてもいいかも、なんて考えてしまうんだから。

「ふん……兎に角、休憩っ！ ……アンタの胸を枕に寝かせてよ」

「ふっ、そんな可愛いお願いされちゃな……嫌とは言えねえや」

くしゃりと、彼の手が私の頭を撫でた。

頭を撫でて、顔を撫でて、私の顎を撫でてくる……まるで猫でもあやすみたいに。

「んっ、もう……猫扱い？ ちょっと酷いんじゃないの？ アンタのために頑張っただけであつた、彼女に対してさ」

「……ハッ。呉香が猫なら、それはそれでいいんだけどな。俺が世界で一番愛する、可愛い子猫だ」

「むっ……誰が、猫……よっ！ はむっ！」

「んお、ちょ、おい……ハハ！ 呉香、君なあ！」

そう言って、行為の後の気怠さの中、私の頬を撫でる彼。頬がくすぐったい。

彼のざらっとした感触の指が触れてくると、なんだかムズムズしてくる。

私は、その指をかぶりっと、甘噛みをしてやった。

ちょうど、彼が私を猫扱いした、そのお返しのように。

「ん、むっ……人を、猫扱いするから、よ！」

「それで噛んできてどうすんだよ。それだと本当に猫みたいだぞ、ったく」

苦笑をしてくるが、手を引っ込める気はない様子の来兔。

だから私は、彼が指を私の口に持ってきてきている間、カプカプと甘噛みを繰り返してやった。

汗を流し、アソコから男女の交わりの液を流しながら……昔の、小さい頃にふざけあった、あの頃みたいに。

「……なあ、呉香」

「んあ、なにほ？」

「……俺は、君の味方だからな」

突然、来兔がそんなことを言ってきた。

私は驚いて、噛んでいた指を放す。

すると、不思議な程真剣な顔をした彼が……じっと、私を見ていた。

「突然何よ、来兔。そんなこと、分かってるわよ……」

「……そっか。それならいいんだ！」

壊れものを扱うみたいに、また私の頬に手を当てる、来兔。

……なんだか、その様子に落ち着かない気分になって、私は思わず彼の手を掴んでしま
う。

「どうしたのよ、急に変よ？ 何かあったの？」

「いや、なんでもない。ただ……」

触れていると、そこに彼の意思が宿っているはずなどないのだが、どくんと一つ脈打ったような気がした……。

「……はあ。他人に話せやしないわね、こんな夢見たなんて。欲求不満なのかと思われそう」

私は寝汗を拭うために、洗面所に向かうと顔を洗う。

今日は、私の教官としての初日となる日だ。

とんだ夢を見させられたが、これで調子を崩して、将来のチルドレンたちに舐められる訳にはいかない。

寝汗を拭き、身体も軽く拭きとると、私は気合を入れるため、両手で頬をパンッと叩く。

「よっし！　ねえ……ずっと、一緒なんですよ？　だったら……」

気合を入れ終わると、用意しておいた着替えに手早く着替え、教官用のジャケットに袖を通す。

最後に私と、もう使えない彼の二口カードを通したキーチェーンを携え、私は扉へと向かう。

……そして最後にもう1度だけ、彼が入った腕と肌に語り掛けた。

「私たちの夢、チルドレンが……救われる世界へ進むため。さあ、行くわよ！　来兔！！」
言って、私は扉を開ける。

未来のチルドレンたちが待つ、その場所へ向かうために。